

一章 序説

1 震旦部研究略史

震旦部の研究状況を概観することによって、問題点を整理し、あわせて本論文の座標をあきらかにしようとする。

近世末期、出典の探索に始まった『今昔物語集』の研究は、出典研究から翻訳論、受容論へ、また、成立論から組織論、あるいは構造論へと展開していった。しかし、『今昔物語集』が先行資料をふまえて構築された作品である以上、研究の動向はどのように変遷しようとも、出典とのかかわりへの配慮を抜きにして立論するわけにはいかない。巻十を除き、ほとんどののはなしの出典がつきとめられている震旦部にあつては、とりわけそうだ。震旦部の研究は、出典とのかかわりを闡明することによって、その意味をもちうる。

したがって本節では、出典研究の推移を軸にして、先導的な役割をはたした研究者の業績をとりあげ、その可能性と限界を見きわめつつ研究史をたどる。

2 震旦は秦にはじまる

天竺、本朝両部と同様、震旦部も、仏法部と非仏法部との二部によって構成されている。そして、震旦部にあつては、仏法、非仏法両部の冒頭に、いずれも秦始皇帝に関するはなしが配されている。

これは偶然ではない。『今昔物語集』は秦始皇帝にこだわっている。そのことは、巻十にみられる編集の手なほしの痕跡からもたしかめられる(六章2節)。

三皇五帝から説きおこす一般的な方法にあらがって、『今昔物語集』が、あえて始皇帝に関するはなしを冒頭にすえたことは、秦を震旦の始源をだとしてらえていることを意味する。と同時に、既成の概念にとらわれることなく、あたらしい世界を構築しようとの意思をもっていたことを示唆している。

二章 出典研究の検討

1 法苑珠林出典説批判

2 法苑珠林出典説批判・再説

3 天竺部の〈出典〉と震旦部の出典との落差

岡本保孝の『出典攷』以来、『法苑珠林』は『今昔物語集』の出典だとされてきた。

『攷証今昔』はさらにそれをおしすすめ、『研究(上)』も、支持した。一方、『大系』は、これを修正しておおはばにしばらくこんだが、それでもなお、『法苑珠林』を主要な出典のひとつだとしている。

しかし、これらは『今昔物語集』には出典があるはずだとの前提にたつて、類話にすぎないものを出典だと誤認したものだ。『法苑珠林』は出典の座から排除されなければならない。『体系』を例にとってみても、『法苑珠林』が出典だとされているものは、出典であることが明白な『三宝感応要略録』や『冥報記』の同話と比較して、あまりにも類似度が低い。文脈はもとより、話柄にも違いがあり、出典関係認定の限度を越えている。

『今昔物語集』は、出典に忠実であろうとする原則を立てていた。『三宝感応要略録』や『冥報記』等との記文の類似状況から見て、この点は動かないだろう。その原則の適用を、『法苑珠林』のばあいに限って除外したとは考えにくい。

『法苑珠林』所載話で、他書以上に『今昔物語集』に近いと認めうるものは、天竺部で十五話、震旦部にいたっては、わずか二話しかない。しかもこれらとて、近さはあくまでも相対的なものであつて、必ずしも両書の結び付きを積極的に支持するものではない。おそらくこれらは、比較検討すべき現存資料の不足、あるいは出典研究の遅れに由来するところの、いわば〈消し残り〉にすぎないのだ。

『法苑珠林』は質・量ともに十分で、資料として用いるにはかつこの書だ。各話には出典名も示してある。しかし『今昔物語集』は、それを介して『法苑珠林』の典拠をたぐり寄せるための、索引としても利用してはいない。

『法苑珠林』は、はやくに将来され、一定のひろがりをもっていたことが書籍目録等から確認される。その『法苑珠林』が、直接にも間接にも用いられていないことは、『今昔物語集』の編集が、『法苑珠林』の流布圏外でおこなわれたことを意味する。

『法苑珠林』出典説は、過去において、『今昔物語集』研究を推進する原動力となってきた。しかし、今や出典研究の遅れた部分にのみ存続しうる説だ。今後は、無関係だとの視座にたつて『今昔物語集』研究をすすめなければならない。

4 弘誓法華伝出典説の検討

『弘誓法華伝』が『今昔物語集』に用いられていることを指摘した片寄正義は、東大寺本の奥書きにもとづき、『今昔物語集』の成立を、その伝来した保安元年(一一二〇)からあまりへだたらない時期と推定。これに対して平林盛得は、保安元年は初伝ではなく、すでに『弘誓法華伝』は伝来しており、誤りのおおいが流布していたからこそ、保安元年伝来本が珍重されたのだと主張した。

しかし、『弘誓法華伝』は、伝来の時期だけがもんだいなのではない。自明のこととして顧みられることのなかった出典説も、『弘誓法華伝』の引用方法を、その典拠たる梁・唐の両『高僧伝』等にさかのぼって検証し、その結果を、『弘誓法華伝』と『今昔物語集』との記文の不一致状況つきあわせていくと、疑問なしとしないのだ。あくまでも、現存の資料に徴するかぎりという限定つきではあるが、『今昔物語集』は『弘誓法華伝』ではなく、未知の資料に依拠していたとする方が説明がつけやすい。『今昔物語集』研究にとって『弘誓法華伝』は留意すべき資料であるだけに、あえて疑義を呈する。

三章 三宝感応要略録の位相

1 三宝感応要略録から慈恩伝へ

『今昔物語集』にとって『三宝感応要略録』はかけがえのない資料であった。はなしの配列、標題の形式等、『今昔物語集』はその主要な部分を『三宝感応要略録』に依拠している。

本節では、『慈恩伝』を出典の一部に加えるべきことを指摘するとともに、それが『三宝感応要略録』の注記をもとにたぐり寄せられたものであることを検証する。『今昔物語集』が『三宝感応要略録』を経由して『慈恩伝』にさかのぼっている例は、震旦部だけでなく、天竺部にも求められる。『今昔物語集』の資料収集の範囲には限界があったが、その資料探索の姿勢は、けっして安易ではなかった。

2 不採用話から

『今昔物語集』にとって『三宝感応要略録』は、かけがえのない資料であった。にもかかわらず、その採用率は『冥報記』よりも低い。これは、『冥報記』がもっぱら震旦の話材で構成されているのに対して、『三宝感応要略録』は天竺種のはなしをおおくふくんでいることによる。じじつ、不採用話のうちでもっとも多数を占めるのは、天竺関係話である。

おそらく編者は、天竺部に関しては『三宝感応要略録』にまさと判断される資料を手しており、『三宝感応要略録』を補助的に用いているのだ。

天竺部の〈出典〉は、全面的に点検しなおす必要があるう。と同時に、未知の資料の存在の可能性にも配慮しつつ、正の側面からだけでなく、負の側面からも資料を検討する必要があることを、不採用話は示唆している。

四章 冥報記の受容と変容

1 前田家本冥報記の近さと遠さ

『冥報記』の現行諸本のうち、前田家本はもっとも『今昔物語集』に近い。それゆえ

『大系』も、前田家本を出典だとしている。

だが、前田家本では説明のつかない記文も少なくない。正しくは、へ前田家本に近似した散佚『冥報記』に依拠したというべきだ。

ところで、前田家本は誤脱のおおい悪本だ。『今昔物語集』の依拠本も、おそらくそうであつたろう。しかし『今昔物語集』は、誤脱による意味不明の箇所につじつまあわせを試みながら、忠実に従おうとしている。

2 構成原則と原典との摺合

『今昔物語集』は典拠に忠実であろうとの方針をたてていた。しかしそれはときとして、いまひとつの原則である二話一類の構成原理となじまないばあいがある。

このような局面に遭遇したとき、『今昔物語集』は後者を優先した。最小限度の手を加えたり、他の資料の表現の一部を導入したり、あるいは、一部のはなしについては、基礎的な資料とは別な資料に求められる類話を採用するなどの方法を用いつつ、構成原理の堅持につとめた。

巻九の、孝養譚から靈異譚への接点に位置する第13話は、『冥報記』を切り捨てて、『打聞集』『宇治拾遺物語』系の資料を採用している。巻九第13話は、編成に意をくだいた様相を、端的に示している。

3 『冥報記』と『靈異記』と『今昔物語集』と

『靈異記』の編者は『冥報記』を熟知していたがゆえに、それに追いつき、追い越すことをめざした。上7の亀報恩譚は、『冥報記』のそれに比肩しうるものであることを、自信をもって示したものであろう。

一方、『今昔物語集』はそれを資料として採用するに際して、若干手を加えた。構成上必要な亀の報恩譚としての性格を、より鮮明にするための加工であった。

4 『冥報記』の継承

i 嚴恭譚から『今昔物語集』九13へ

『冥報記』は、それ自体のもつ浸透力によって、成立直後に『法苑珠林』に引用されて以来、おおくの文献に継承されていった。所収話を個別にみると、嚴恭の放生に対する亀の報恩譚が、もっともおおくの文献にとりあげられている。『今昔物語集』も『冥報記』受容史の一角をしめる作品であるが、亀報恩譚の流れを汲む九13に関するかぎり、直接には、日本化された資料に依っているため、『冥報記』とはほど遠いものになっている。

ii 聖への回帰

『冥報記』をもっとも大量に受けとめたのは、『法苑珠林』であった。『太平広記』も『冥報記』に発するはなしを大量にそなえている。しかし、これは『法苑珠林』からの孫引きだ。さらに近世の禅僧の手になる『善悪現驗報応編』は、まず『太平広記』に触発されて、そこから大量にはなしを導入して編成する一方、『冥報記』関係話に関しては『太平広記』からではなく、『法苑珠林』から取り込んだ。

『冥報記』の流れは、近世にいたるまで脈々と続いていた。

五章 資料への再評価

1 注好選の資料性

天竺部の各巻と、震旦部の巻九・十に多数の類話をもつ『注好選』は、『今昔物語集』の成立事情をうかがわせる資料として、留意すべき存在だ。

近時、東寺観智院本が出現するにおよんでようやく注目をあつめはじめたけれど、それまではほとんど顧みられることもなかった。『注好選』をとりあげたわずかな論も、『今昔物語集』の影響史をたどる資料だとの立場にたっていた。

こうした状況は、つまるところ、未知の資料の存在に対する配慮の欠落に由来する。

新資料の出現にともなう前説を訂正し、一転して『注好選』を『今昔物語集』の出典だと認定した論者もいるが、これもまた未知の資料の存在への配慮を欠いたものというべきだろう。

あらゆる可能性を想定しつつ、資料への合理的な推理をしていくとき、あらたにみえて

くる『今昔物語集』の一面も少なくない。三国仏法史を志向しながら、仏教的にはかならずしも正統的ではない資料を重用しているのも、そうした点のひとつだ。

2 打聞集系資料との交錯

巻六冒頭の、仏法の震旦伝来を内容とする六話は、出典がさだかでない。そこで、可能なかぎり類話を探索して整理をすすめると、『打聞集』にみるかたちの話型と表現とをそなえた資料に依っていると解するのが、もっともおさまりがよい。

3 俊頼随脳への依存

震旦部の素材は、中国伝来の文献に求めるのがすじであろう。ところが巻十には、日本で編まれた文献にもとづいているはなしが少なくない。それがどのような事情によるものかについての所見は七章一節でふれるが、ここでは『俊頼随脳』がたしかに資料として用いられていることを、張鑑譚(十4)、王照君譚(十5)、下和譚(十29)等をおして検証する。

『俊頼随脳』にみられる中国種のはなしは、他の文献に求められる類話とは一線を画しており、いわば〈俊頼的屈折〉を示していることを特色とする。下和譚の〈血の涙〉は、その〈俊頼的屈折〉のひとつであり、両者が不可分の関係にあることの、動かしがたい証左となる。

第六章 標題考

1 標題の特性

『今昔物語集』の各話に付されている標題は、はなしの内容を主・述のかたちにまとめるという方法をとっている。当該話が深いかかわりをもつ寺社や人物等を、なんの説明も加えずにそのまま標題にかかげる従来の説話集、ないし、それに準ずる作品のなかにあって、『今昔物語集』の標題は画期的なありようを示している。

標題と本文のあいだには、ずれのみとめられるものがある。ずれの成因は、おおむね標題の側にある。前後のはなしとの調和をはかって、標題がつけられているのだ。

形式的にもあたらしい意図的な標題には、新境地を開拓しようとする編者の意図が込められている。

2 標題の策定

形式的に整備された標題は、集合の論理に裏打ちされたものだ。標題は、享受者の理会の方角づけをはかると同時に、編者の説話理会のありかたをも示している。

『今昔物語集』を特徴づける標題の形式は、『三宝感応要略録』を雛形にしたものだ。

3 目録標題と本文標題との齟齬

各巻のはじめに付されている目録標題と、各話に付されている本文標題とは、本来同じものであるはずだ。しかし、違いのある例が天竺・震旦・本朝の各領域にわたって検出できる。しかも留意すべきことに、これらの大半は組織の論理にもとづく構造的なものだ。

目録標題と本文標題との齟齬のもっとも顕著な巻十(鈴鹿本)を中心に、その成因を検討していくと、編集過程での、資料不足にともなう試行錯誤や、混乱の様相が浮かびあがってくる。

4 編集計画の手直し

前節に引き続き、巻十の標題への考察を試みる。

当初採録する予定であったはなしを削除、あるいは他の巻へ移行させたとき、変更の影響を最小限度にとどめるためには、補充するはなしは初案のものと通じあう内容であることが望ましい。

しかし、つねに期待にかなうはなしが見付かるとはかぎらない。新旧ふたつのはなしの確認できる例を中心に採否の基準をみていくと、巻十の輪郭が浮かびあがってくる。

巻十には、二群の国王譚がある。いわゆる有名王譚群と無名王譚群だ。ふたつの群は截然と区別されている。巻十は、〈国史〉の巻たるべく、この二群の国王譚を基軸に、三部構成二層方式とでも呼ぶべき構造になっている。

5 組織へのこだわり

標題は、編成上の要請と、個々のはなしへの興味とのせめぎあいのなかで策定され、さまざまな解釈の可能な本文への、解釈の一元化をはかる機能をもつ。編成上の要請と、はなしへの興味とが相拮抗するばあいには、『今昔物語集』は前者を優先している。標題と本文とのずれの成因は、おおむね標題の本文ばなれだ。

6 天竺部の標題の整備と不整備

震旦部に比して、天竺部の標題は未成熟だ。本文標題と目録標題とのずれにしても、標題と本文とのずれにしても、震旦部ほど志向性が強くない。これは整備が途上にあることによるものである。

ただし、巻一は四部構成、巻四は聖俗の二部構成をもくろんだふしがみえる。

七章 資料収集の限界

1 莊子系孔子譚の選択

思想・信条において儒教に近い立場に立つ『今昔物語集』の編者が、にもかかわらず『莊子』系の孔子譚をとりあげたのは、それらがはなしとしての魅力に富むという一面はあったにせよ、基本的には、資料の不足によると考えざるをえない。

『莊子』系孔子譚が採用されたについては、当時、それが世上におこなわれていたという背景もある。孔子が崇敬の念をもって説話の世界で語られるようになるのは、中世になってからだ。

2 三韓の欠落

『今昔物語集』に三韓の部がなく、三韓をとりあげたはなしも少ないのは、第一には古来、日本人の目が大陸に向けられていたからであり、第二には、編者の手の届くところに、しかるべき資料がなかったからだろう。

しかるべき資料が編者の目に触れなかった理由としては、さしあたり、つぎの二点が考えられよう。すなわち、三韓の側に有効な資料がなかったばあいと、あったとしても入手しえなかったばあいとである。

三韓の側に、有効な資料があったという保証はない。かりにあったとしても、『今昔物語集』の資料収集能力には限界があり、それを入手しえなかった可能性は多分にある。將來されていたことがたしかで、しかも利用価値の高い『法苑珠林』や梁・唐の両『高僧伝』でさえ、『今昔物語集』は資料群のなかに含めていないのだ。『今昔物語集』の資料収集能力を過大評価してはならない。

絶対量は少ないけれど、『三宝感応要略録』所収の三韓に関するはなしは、すべて『今昔物語集』に採録されている。本朝部においても、『靈異記』所収の三韓に関するはなしは、すべて採録されている。三韓関係話は、三韓関係話であるがゆえに排除されたのではない。